藤女子大学人間生活学部紀要，第 52 号：35-46．平成 27 年．
The Bulletin of the Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University, No. 52: 35-46. 2015.

View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

宮沢賢治の「どんぐりと山猫」の栄養療法
すきとおったたべもの

── 栄養療法の知的枠組についての研究 12 ──

藤　井　義　博

Transparent Nourishment in Miyazawa Kenji's "The Acorns and Wildcat"

── A Study on the Paradigms of Nutrition Therapy 12 ──

Yoshihiro FUJII

Abstract

This study was an attempt to understand *Miyazawa Kenji*'s "The Acorns and Wildcat", one of the author's mental-image sketches published in the style of children' tales, in terms of transparent nourishment that he implored his reader of "The Restaurant of Many Orders", a collection of tales including the above, to make of the overall message of the author's mental-image sketches. If the author's mental images (*shinshō*) were what the Other revealed itself to the honest, innocent mind of the author in a face-to-face encounter with a person or a thing, and his mental-image sketches were exact verbal expressions of these mental images, then his mental-image sketches should be the sketches of the Other rather than a representation of a person or a thing according to commonly-held notions. Thus the author's mental-image sketches will engender in the reader double meanings about a person or a thing described: that conveyed by the sketches of the Other and that derived from commonly-held notions of a person or a thing. In "The Acorns and Wildcat", the double meanings correspond to a modern meaning since the Meiji Restoration, the opening of the country to the modern world, and an ancient meaning in a pre-Westernized, traditional society before it. The journey of Ichiro setting out in search of Wildcat in the mountain is psychologically equivalent to that in search for the Deity by following the trace of the portable shrine parading in the streets to return to the old *Toriyagasaki Shrine* of *Hanamaki*. A difficult case to judge announced in a most peculiar postcard was not a modern lawsuit but an old-fashioned telling by the boss, Wildcat, to his subordinates, Acorns. Each golden Acorn's claim for being the greatest (*ichiban erai*) will have a totally different meaning, when "*erai*", a modern word meaning great or honorable is replaced by "*kashikoshi*", an ancient word with comparable meaning that has the original

所属：
藤女子大学人間生活学部食物栄養学科、人間生活学研究科食物栄養学専攻
Department of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Sciences, and Division of Food Science and Human Nutrition, Graduate School of Human Life Sciences, Fuji Women's University

meaning of inspiring a feeling of awe.

Wildcat's bully, authoritarian, selfish attitude and language brought out the attribute of being a rational adult from Ichiro and extinguished from him that of being an honest, innocent, considerate schoolboy, thus a face-to-face encounter with each other did not occur. The author seems to ask the reader with the attribute of being an honest, innocent, considerate child to have courage to put himself in a face-to-face encounter with a bully, authoritarian, selfish person, and to keep up his honesty, innocence and consideration to find out in the interlocutor not a negative example but the attribute of being a potentially positive teacher for him.

1．はじめに

現代では日本を代表する詩人・童話作家として国際的に知られるようになった宮澤賢治（1896〜1933）は、ほとんど世に知られることなく亡くなった[1]。賢治は、生前に2つの著作を刊行した。すなわち1924年4月の心象スケッチ「春と修羅」の自費出版および同年12月の「どんぐりと山猫」をはじめとする9篇の童話を含む童話集「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」の刊行である。賢治は2つの著作を刊行したにもかかわらず、なぜその後37歳で亡くなるまでの9年、郷里においてはともかく広く日本社会で注目されることがなかったのか。そのヒントは2つの著作の刊行目的にある。

賢治が「春と修羅」を自費出版により公表した目的は何であったのか。そのあたりの消息は、森佐一あての書簡において述べられている[2]。すなわち賢治は、歴史や宗教の位置を全く変換しようと企画し、それを誰かに見てもらいたいと思っていたのであった。しかし「春と修羅」を贈った宗教家やいろいろの人たちはどこも見てくれなかったと述べている。また、「春と修羅」が詩としていいも悪いもあったものでないにもかかわらず新聞や雑誌でほめられ、いままでのつぎはぎしたものと混ぜられたと賢治は不満を表明している。賢治は詩人としてデビューするために「春と修羅」を自費出版したのではなかった。彼は、社会通念やその他の概念（これらを賢治は「幻想」と表現した。）によって現象を解釈しないで、耐えて、現象から真実（「まことのことば」）を受けとるようになる自己の内面の真実の過程を人々と共有したかったのである。そのような賢治にとって、「春と修羅」の自費出版は、「無謀な」企画であったし、誰かに見てもらいたいとは「愚かにも考へた」誤りであった。賢治は中央文壇に詩人としてデビューする機会を自ら棒に振ったのであった。

何の弁明もしないままに自費出版した「春と修羅」の「失敗」にこりたためか、賢治の童話集「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」の刊行に際しては大小二種の広告チラシが作られた。それらには、賢治によって書かれたと考えられる解題および各篇の簡潔な説明が掲載されている[3]。イーハトヴとは「実にこれは著者の心象中に、この様な状景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県」である。この童話集は「実に作者の心象スケッチの一部」であり、「古風な童話としての形式と地方色とを以て類集したもの」である。そしてこの童話集の巻頭を飾る「どんぐりと山猫」については、「山猫拝と書いたおかしな葉書が来たので、こどもが山の風の中へ出かけて行くはなし。必ず比較をされなければ（ママ）ならないいまの学童たちの内奥からの反響です。」と説明されている。

広告チラシには心象スケッチの定義と存在意義の表明がなされている。それは、「多少の再度の内省と分析とはあっても、たしかにこの通りその時心象の中に現はれたものある。故にそれは、どんなに馬鹿げてゐいても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である。」童話集「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」は、古風な童話としての形式を備えているといえども、子どもを対象にした童話ではない。かといって「卑怯な成人たち」を含む大人一般を対象にしたものでもない。強いて云えば、子ども心をもつ大人だけが対象ということになるであろう。このように童話集「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」は、童話作家として賢治を中央文壇にデビューさせることはできなかった。

本論は、童話集「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」の冒頭を飾る童話「どんぐりと山猫」において、この童話集の序で賢治が読者に願った「あ

なたのすきとほつたほんたうのたべものになること」が何かを読み解くことであった。

2．資料と方法

宮澤賢治の著作のテクストとして、「新校本宮澤賢治全集」全16巻、別巻1巻（筑摩書房、1995〜2009年）を用いた。とりわけ、宮澤賢治の著作「どんぐりと山猫」のテクストとして、「新校本宮澤賢治全集」第12巻本文篇および校異篇（筑摩書房、1995年）を用いた。

3．face-to-face

童話「どんぐりと山猫」は向かい合うことすなわちface-to-faceをテーマとした話ととらえることができる。それは、山猫拝と書いたおかしな葉書が来たので、山の風の中へ出かけて行く一郎が様々に向かい合うだけでなく、この物語を読む読者もまたさまざまに向かい合うことが要求されているテーマである。face-to-faceは、遭遇する前に思い抱いていた対象の姿とは違って、遭遇により全く違う新たな姿をまとって対象が現前することである。それは、既知の発見に加えて、遭遇により対象の中に新たな発見が追加されることではない。むしろ対象から全く思いもかけなかった容貌が啓示されることである。このように啓示された容貌とは「他者」のことである。「他者」の啓示は、現実を超えるもの、あるいは普通知覚できないものを知覚するなど、超現実的世界、理性を超える世界すなわち異界に踏み入ることではない。それは現実に存在する「他者」である。しかしそれは利己的な自我に基づいて対象を概念化する方法では把握し得ない「他者」である。むしろ利己的な視点を脱したときにはじめて対象から啓示されてくる容貌である。「他者」は、対象とのface-to-faceの遭遇によって対象から啓示される容貌である。それは、芭蕉の「松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へ」[4]という言葉に込められた哲学すなわち私意を離れることによってはじめてもたらされる松の姿、竹の姿である。あるいは、face-to-faceの患者—医師関係において医師に啓示される「患者から直接起こるところの（医師における）思念」[5]である。このようにface-to-faceの遭遇は、遭遇の主体に対象は2つの意味もっていたことを覚らせる：face-to-faceの以前に把握されていた意味とそれ以後に啓示された意味とである。

賢治の云う心象とは、対象とのface-to-faceにより「他者」から啓示されたことである。その心象を「多少の再度の内省と分析とはあっても」その通り表出した容貌が心象スケッチであるなら、心象スケッチは、それを読む読者にとっては対象ごとに先入的な概念と啓示された容貌という意味の二重性に満ちたスケッチと把握される。心象スケッチである童話集「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」はこのような意味の二重性あるいは多義性に満ちている物語である。

4．イーハトヴ童話　注文の多い料理店

「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」というタイトルにはすでに二重性が豊富である。まず、「注文の多い料理店」というタイトルは童話集のタイトルでありまたそれに含まれる一篇の童話のタイトルでもある。このようなタイトルの二重性ないしは多重性は、心象スケッチ「春と修羅」においても見られる。その心象スケッチの全体は、「春と修羅」を含む8篇の詩篇集からなり、そして詩篇集「春と修羅」は、また詩篇「春と修羅」を含んでいる。「春と修羅」は、詩篇、詩篇集、そして詩篇集を総括する全体のタイトルとして3重に使われている。

童話集「注文の多い料理店」というタイトルには、「注文の多い料理店」という意味の二重性もある。なぜ「料理店」なのか。この童話集の序において、賢治は読者に対して「これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになること」を願っている。この精神的な糧になることの願いにおいて、この童話集は読者にとってのよい料理店であるという自負が含まれている。さらに、この願いを「どんなにねがふかわかりません」と強く表現することにおいて、この童話集は作者が読者に対してたくさんの注文をする「注文の多い料理店」でもある。さらに、一篇の童話としての「注文の多い料理店」というタイトルには、繁盛している料理店という意味のほか、客を食べるために客にたくさんの注文をする料理店という意味もある。すると読者にとって童話が「すきとほつたたべもの」になることは、作者から見れば読者のこころ

をいただくことになる。読者は童話という精神のレストランにおいて「すきとほつたたべもの」を得るすなわちいただく客であり、作者は読者である客のこころを得るすなわちいただくレストランのオーナーである。

5．どんぐりと山猫

「どんぐりと山猫」というタイトルにも二重性がある。このタイトルに読者は、どんぐりと山猫の間の物語を予想するであろう。実際、イソップ童話には「アリとキリギリス」、「ウサギとカメ」、「北風と太陽」など、ふたりの主人公を並列したタイトル名の童話が多く、いずれもタイトルのふたりの主人公が童話の実際の主人公でもある。これに対して、「どんぐりと山猫」では、どんぐりは「めんどなさいばん」を起こした張本人たちであり、山猫はその判事であるものの、両者だけが童話の主人公とはいいがたい。実際、童話集「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」の刊行に際して作られた広告チラシにおいては、「どんぐりと山猫」は、「山猫拝と書いたおかしな葉書が来たので、こどもが山の風の中へ出かけて行くはなし。必ず比較をされなければならないいまの学童たちの内奥からの反響です。」と説明されている。この広告チラシにはどんぐりへの言及は一切ない。そしてタイトルにない学童への言及がある。この広告チラシの２つのセンテンスのうち、最初のセンテンスからは主人公はむしろこどもすなわち一郎と考えられる。そうならば賢治はなぜ「どんぐりと山猫」をこの童話のタイトルとしたのか。ここにおいて、２番目のセンテンスの意味が問題になる。童話においていまの学童たちの内奥からの反響と比較できる存在はドングリたちだけであろうから、ドングリたちの内奥の反響を学童たちのそれと比較することになる。そうするとドングリたちの判事として描かれている山猫は、どんぐりが学童に対応するように、まさに学童たちの先生に対応することになる。賢治は、「学童と先生」という意味をもこめて「どんぐりと山猫」をタイトルにしたと考えられる。そして里の学童の一郎は、それぞれ山の学童と先生であるどんぐりと山猫に出会うことになる。そうならば先生である山猫はなぜ裁判所の判事なのか。生徒であるドングリたちは何を裁判に訴えるのか。なぜ裁判に訴えなければならないのか。これらを読み解くために、その礎となる９月19日の意味の多義性の読み解きから始める。

6．九月十九日

山猫から送られてきた「おかしなはがき」の日付の９日19日には２つ意味がある。ひとつは、「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」の初版本の目次に付けられた「どんぐりと山猫」の制作日付の1921年９月19日との呼応である。作品誕生の記念日が、たくさんのドングリが実る季節の物語を告げる葉書の日付けと重ねられていることは十分に考えられる。

しかしは賢治にとって９日19日はもうひとつの大切な意味をもつように思われる。この童話の制作の12年後、賢治が亡くなる年の1933年は大変な豊作であった。花巻の鳥谷ヶ崎神社の祭礼には大勢の人々が出て盛りあがり、９月17日には裏二階で臥床がちの賢治もその光景を見るために店先へ下りて終日楽しんだ。翌18日も、門のところまで出たり、店先にすわったりして町の賑わいや踊りまわる鹿おどりを見ていた。そして祭礼第三日の19日には、賢治は神社に還御する神輿を拝みたいといい、みんなで手伝って二階からおろし、夜の冷気のきつい中門のところへ出てじっと待っていた。そして夜８時、神輿をお迎えすると拝礼して家に入った[6]。賢治はその２日後の９月21日午後１時30分に亡くなっている。このように賢治が楽しみにしていた花巻の鳥谷ヶ崎神社の祭礼は、毎年９月17日から３日間の行事であった[7]。祭礼では神輿は神社を出て一日町をねり歩き、その夜から裏町のお旅屋という所へお泊りになり、19日にまた町をねり歩いて20日の未明に神社に帰られるのがしきたりになっていたという。

童話「どんぐりと山猫」は毎年９月17日から三日間にわたって執り行われる鳥谷ヶ崎神社の祭礼の最終日と神輿が神社に帰還する翌20日を時限とした心象スケッチである。童話「どんぐりと山猫」の物語の展開は、９月19日の日付の葉書が夕方に送られてきたことに始まり、翌20日の朝に山に行った一郎が三日間にわたる「めんどなさいばん」を解決してその日のうちに戻ってくるまでである。このように９月19日を花巻の鳥谷ヶ崎神社の三日間にわたる祭礼の最終日ととらえると、「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」の幾つかの

謎が腑に落ちるようになる。

「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」は、祭礼の最終日を時限とした童話「どんぐりと山猫」で幕が開き、祭礼中に繰り広げられる鹿おどりの起源に関する童話「鹿踊りのはじまり」で幕を閉じるという構成をとっている。祭礼に関する童話「どんぐりと山猫」の次に森の起源についての童話「狼森と笊森、盗森」が続く。そして六篇の童話を経て、最後にまた祭礼に関する童話「鹿踊のはじまり」に戻ってきて、鹿踊の起源に遡及して童話集全体が完結する。毎年決まった時期に繰り返される鳥谷ヶ崎神社の祭礼の経年的循環を意識して童話が構成され配列されているように思われる。

鳥谷ヶ崎神社の祭礼をもとにして「ドングリと山猫」を解釈すると、山猫の乗った馬車は神輿と重なる。山猫の言葉の「どうもまい年、この裁判でくるしみます」は、毎年の祭礼である。山猫の「裁判も今日で（注、9月20日）三日目だぞ。」は、三日間の祭礼が終わり、神輿が再び神社に帰還する日であることを喚起している。そして一郎の申し渡しによりその日のうちに裁判は決着し、つつがなく今年の祭礼は終わったことになる。

7.「どんぐりと山猫」の三層構造

7.1. 里：非祭礼的時空間

「どんぐりと山猫」の物語は、里そして谷それから山にて展開して、最後に里に戻ってきて終わるという循環的構成をもっている。里の学童である一郎は、山に住む山猫から「おかしなはがき」が送られてきたことから、谷川に沿った小道をのぼって行き、そして谷を離れてから山猫の住む森の山に至る。山での裁判で役目を果たした一郎はお礼をもらって再び里に戻ってくる。

童話では、里には一郎の住む「うち」があり、通っている「学校」があることになっている。しかし物語には家の様子は描かれないし一郎の家族も友達も一切登場しない。一郎を乗せた馬車が一郎のうちの前で止まった時には、山猫からもらった黄金のドングリはあたりまえの茶色のドングリに変わっており、いっしょに乗っていた山猫も、馬車を操縦していた別当も、きのこの馬車も一度に見えなくなった。里は日常の時空間である。それは祭礼の神輿が神社に還御した後から始まり、翌年の同じ時期にそれが再び出てくるときに終わる非祝祭的な時空間である。

7.2. 谷と山：祭礼的時空間

谷と山は1年のうちの祭礼の三日間だけの祝祭的な時空間に呼応している。谷は山を里から隔てる時空間である。山に至るためには谷というすき間を通過しなければならない。谷は祭礼の日に神社（すなわち山）を出た神輿が町（すなわち里）をねり歩くその道筋の時空間である。すき間すなわち谷川に沿ったこみちをのぼってゆく一郎は、途中、栗の木、笛ふきの滝、変な楽隊のきのこ、そして一本のくるみの木の梢の栗鼠にそれぞれ出会う。そしてそのたびに「やまねこがここを通らなかったかい。」と同じ質問を繰り返す。このときの一郎の態度が注目される。一郎は、「栗の木をみあげて」、「滝に向いて」、「からだをかがめて」、「栗鼠に向かって」、それどれ相手との face-to-face を心掛けている。そして答えをきいておかしいと思うものの、けれどもまあもう少し行ってみようと自分の進路は変えることはなかった。一郎はそれぞれの返答へのお礼のありがとうを忘れなかった。一郎はあたかも祭礼の間、町をねり歩く神輿の行方を町の人々に尋ねるように、山猫がここを通らなかったかときいているようである。町の人々が、神輿が、神社を出て一日町をねり歩き、その夜から裏町のお旅屋という所へ泊り、9月19日にまた町をねり歩いて20日の未明に神社に帰ることを知っているように、一郎もまた山猫の行方を知っているようである。

山は、谷とは非連続の、急峻で鬱蒼とした森の中のうつくしい黄金いろの草地であった。一郎が辿る谷川に沿った道は細くなって消えてしまい、新たな道を一郎はまっ黒な榧（かや）の木の森の方へとのぼって行った。そしてたいへん急な坂をのぼりきると、そこは青空の全く見えない鬱蒼とした森の中のうつくしい黄金（きん）いろの草地であった。これが一郎の目指した山であった。そこは神輿が還御する神社でもある。ここで一郎は、せいの低いおかしな形の男に出会い、それから山猫に会うことになる。

8. おかしなはがき

「どんぐりと山猫」を何度もよく読むと、一郎に送られてきた葉書に書かれた言葉とそれが示して

いる概念には里での視点と山での視点という二重性があることに気づかされる。それは、山ねこ拝と書かれた「おかしなはがき」を書いた主体と山猫との二重性であり、「めんどなさいばん」、「とびどぐもたないでくなさい」の意味のそれぞれの二重性である。

8.1. おかしなはがきの差出人

「山ねこ　拝」と書かれた「おかしなはがき」が里に送られてきたならば、それは一郎も読者も誰しも山猫自身によるものと思うであろう。そしてそれがめんどうな裁判への招聘状ならば、裁判官や判事としての山猫像が想像される。一郎が出かけていった山ではへんなものを着て異様な体つきの男に出会い、気味が悪かったが一郎はその男と対面する。そしてその葉書が自らからの手によるものであることを知らされるとともに彼の名前が馬車別当であることを知る。これは葉書から一郎が心に描いていたそれまでの山猫像の修正が必要なことを意味する。

山猫は一郎の背後にその姿を現す。ふりかえってその姿を見た一郎は、「やっぱり山猫の耳は、立ってゐるな」と思うだけであった。山猫は着ている陣羽織のようなものも容貌もむしろ一郎が予想していた「にやあとした顔」に矛盾しなかった。「おかしなはがき」のへたな字と指にくっつくくらいのがさがさした墨は、山猫ではなく馬車別当によるものであったが、一郎の描いていた山猫像は実際の山猫に会っても同じままであった。一郎は、山猫とは face-to-face の遭遇に至ることができなかった。

8.2. めんどなさいばん

葉書が送られてきた日の夜、一郎が考えた「めんどなさいばん」のけしきは、近代的な裁判制度による訴訟の解決の場面であったはずである。「どんぐりと山猫」が作成された 1921 年の当時すなわち近代世界に開国して以来半世紀が経過した近代国家の読者にとっては、裁判の妥当な解釈である。しかし一郎が実際に山で目撃したのは、ドングリたちの訴えを裁判所の山猫判事が裁定するという近代的な訴訟ではなかった。「まるで奈良のだいぶつさまにさんけいするみんなの絵のやうだ」と一郎が表現するように、ドングリたちの一見すると集団訴訟にみえるその実態は、ドングリのうちだれが「いちばんえらい」かについて山猫から裁きを受けることであった。葉書に書かれた「めんどなさいばん」は古風な「捌(さば)き」のことであった。

古語の「捌き」は、(1)複雑な事物を適正に処理する、(2)裁断する。裁判する。(3)その人の意のままに左右することという 3 つの意味を含む（岩波古語辞典　増訂版）。「わたしのはうがよほど大きいと、きのふも判事さんがおつしやつたぢやないか」とどんぐりが云っているように、山猫は、具体的なものを計ることしかできず、「いちばんえらい」のは誰かという複雑な事物を適正に処理する基準もたなかった。馬車別当の皮鞭を鳴らす音による威嚇、山猫の威張った言い方の「なかなおりせよ！」という喧嘩両成敗の方法、そして「ここを何と心得る」という権威への服従を強いる方法しかもたなかった。このような古風な方法では近代的なドングリ達は静まらず、納得しなかった。そこで山猫はこの「めんどなさいばん」を解決するための判事代理として里の一郎に目を付けたことになる。

8.3. とびどぐもたないでくなさい

一郎に送られてきた葉書の「とびどぐもたないでくなさい」の意味もいろいろ考えられる。ひとつは、得体の知れない山猫に会いに山に行くときに、護身用とはいえ山猫に対して用いる可能性のある飛び道具は持たないようにという注意である。こどもの一郎が飛び道具を持つことは不自然であるが、用心深い山猫なればこその警戒心ともいえる。実際、山猫はやってきた一郎にたばこをすすめ、一郎がびっくりして拒否すると、「お若いから」と言っている。これは、一郎が飛び道具を持つような問題児かどうかをためしたためとも解釈できる。二つめは、「めんどなさいばん」だからといっても平和的に解決を図る裁判なので、一郎が飛び道具を使って脅したりはしないようにという注意である。確かに山猫は裁判では飛び道具は用いなかった。しかし裁判ではドングリたちを静めるために馬車別当に鞭を用いさせている。飛び道具を持たないでくださいという注意は、鞭はいいが飛び道具はいけないという山猫の身勝手な態度を示す表現でもある。

9．山猫とどんぐり

「めんどなさいばん」は、ブナ科の木の実の総称であるドングリのうちだれが「いちばんえらい」か山猫が捌きを下すことであった。「どうもまい年、この裁判でくるしみます」との山猫の言葉は、自分の判事としての資質を棚に上げて、いずれも凡庸なだけであって優劣のないことに譬えていう「どんぐりの丈競べ」を口実としているように思われる。実際、一郎が判事の謝礼に山猫からもらった一升の黄金のドングリも里ではあたりまえの茶色のドングリにみんな変わってしまった。もともと優劣がないドングリに対して優劣の捌きを下すことほどむつかしいことはないというのが山猫の言い分である。

しかしこの捌きは、ドングリたちの置かれている状況からみると事情は変わってくる。山のドングリはみんな輝かしい黄金のドングリである。そうならば黄金のドングリの間で何も優劣の捌きを受ける必要はない。みんな素晴らしい黄金いろのドングリではないか。そうするとそれぞれ自分が一番えらいというドングリたちの訴えは、黄金のドングリはそれぞれ素晴らしいのだというメッセージを与えられていないドングリたちの悲しい状況があるからである。それを「めんどなさいばん」と解釈する山猫はまるでドングリたちのおかれている悲しい状況や彼らの本当の気持ちをわかっていないことになる。ドングリたちは tabula rasa[8] つまり白紙であり、その繊細な心の養育は繊細でないといけないという原則が実施されていなかった。あるいはドングリたちは愛語[9] を受け取って育ってこなかった。もしドングリたち、学童たちが tabula rasa として繊細な養育と愛語とをうけとるならば、「どんぐりの丈競べ」という譬えは用いられなくなるであろう。

「めんどなさいばん」を近代的な裁判ではなく古風な捌きととらえるならば、「えらい」も近代的な「偉い」ではなくその古語の「かしこし」ととらえることができる。「かしこし」は、岩波　古語辞典増訂版によると、「海・山・坂・道・岩・風・雷など、あらゆる自然の事物に精霊を認め、それらの霊威に対して感じる、古代日本人の身も心もすくむような畏怖の気持ちをいうのが原義であり、転じて、畏敬すべき立場・能力をもった、人・生き物や一般の現象も形容する。」ここから（生き物や事物が）すぐれている、まさっているという意味が派生し、「えらい」の意味に近くなってくる。「えらい」を「かしこし」ととらえると、ドングリたちのそれぞれ自分が一番えらいという主張は、身も心もすくむような畏怖の気持ちを引き起こす霊威をもっているのはわたしだという積極的な主張となる。

10．一郎とどんぐり

訴えをやめないドングリたちに言い渡す言葉としてお説教で聞いた言葉を一郎は山猫に告げた。それは、「このなかでいちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなつてゐないやうなのが、いちばんえらい」というものであった。これは、ドングリたちがそれぞれ主張している属性とはまるで反対の属性こそがいちばんえらいとする判断である。山猫はこの言葉を受けて、「いかにも気取つて」ドングリたちに申し渡しをした。「よろしい。しづかにしろ。申しわたしだ。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなつてゐなくて、あたまのつぶれたやうなやつが、いちばんえらいのだ。」ここで山猫は、「よろしい。しづかにしろ。申しわたしだ。」を除いても、一郎の云った言葉の重要な部分を微妙に言い換えている。「いちばんばかで」が「いちばんえらくなくて、ばかで」に変わり、そして「まるでなつてゐないやうなの」が「てんであたまのつぶれたやうなやつ」に変わっている。すなわち山猫は、「ばか」を「えらくない」と解釈し、「まるでなつてゐない」を「てんであたまのつぶれた」と、より侮蔑の感情のこもった言い方に変えている。

一郎がお説教できいた言葉は、「ばかこそが、えらい」というものであった。これは、「えらい」とは本当は身も心もすくむような畏怖の気持ちを引き起こす霊威の有無であることを気づかせる深い思想である。ところが山猫の云い方では「ばかは、えらくなくて、えらい」となってしまっている。つまり内容の矛盾した申し渡しになっている。「どんぐりは、しいんとしてしまひました。それはそれはしいんとして、堅まつてしまひました。」とあるように、この支離滅裂の申し渡しはドングリたちから一切の希望を剝奪してしまったようである。もし「ばかこそが、えらい」と申し渡していたならば、ドングリたちには逆説的に希望が与えられ

ることになり、いつかは自らの愚を覚るに至ったかもしれないと想像される。

11．山猫と一郎

山猫は「めんどなさいばん」になぜ一郎を選んだのであろうか。「とびどぐもたないでくなさい」と念を押していることから、山猫はどうも大人を信用していないように思われる。大人ではなく飛び道具を持っていないであろう子どもが招聘の候補枠になったと考えられる。

子どもの中でも一郎が選ばれた理由は、彼の態度にあらわれているように思われる。一郎は、送られてきた「おかしなはがき」に、うれしくてうれしくてたまらず、うちじゅうとんだりはねたり、また寝床にもぐってからもいろいろ考えて遅くまで眠らないような天真爛漫な子どもであった。一郎は、谷川のこみちで栗の木、笛ふきの滝、たくさんの白いきのこや栗鼠に同じ質問をしたが、その態度は素直に面と向かい無邪気であった。栗の木には見上げてきき、滝には向いて叫び、きのこにはからだをかがめてきき、梢をとんでる栗鼠には手招きをしてそれを止めてたずねている。それぞれの返答に「おかしいな」と思うもののありがとうの返礼を忘れなかった。一郎が素直で無邪気な子供であったからこそ山猫は一郎を招聘したと思われる。

鬱蒼とした森の中のうつくしい黄金いろの草地では、一郎はせいの低いおかしな形の男に出会い、気味が悪かったがなるべく落ちついてたずねる勇気も持っていた。劣等感に苛まれたその男の下をむいてかなしそうにいう言い方にきのどくになったり、その男の声があまりに力なくあわれに聞こえたり、一郎は、相手の気持ちを思いやることのできる子供でもあった。だからこそ一郎はその男の名前が馬車別当であることを知ることができた。一郎は相手の気持ちを思いやれる子どもであったことが山猫に呼ばれたもうひとつの理由であったと思われる。

しかし山猫と出会った一郎には、天真爛漫で相手を思いやれる子供とは違う側面があらわれる。ふりかえって山猫に遭遇した一郎は、「やっぱり山猫の耳は、立ってゐるな」と思った。山猫の容貌は一郎が予想していた「にやあとした顔」以上ではなかった。これは栗の木、笛ふきの滝、たくさんの白いきのこや栗鼠そして馬車別当と対面したときの一郎の態度とは異なっている。山猫は本心をあらわさないポーカーフェースであったことが想像される。

山猫はぴょこっとおじぎをする。それに一郎は丁寧に挨拶したが、山猫はひげをぴんとひっぱって、腹を突き出して事情を説明する。そして巻きたばこの箱を出して、自分が一本くわえて、いかがですかと一郎に出す。これに一郎はびっくりして、いいえと云う。山猫は相手に配慮しない権威主義的でぞんざいな態度をとっているようである。一郎も山猫もお互いに挨拶のことばは述べるものの、相手への呼びかけも、お互いの名乗りもしなかった。

そのうちドングリたちが集まってきて、裁判が始まり、馬車別当の皮鞭を鳴らす音や山猫の威張った言い方で仲直りを強いてもドングリ達は静まらない。そこで山猫から相談された一郎は、お説教できいた言葉を山猫に伝え、山猫はそれを改変してドングリたちに申し渡しを下す。それを聞いたドングリたちはしいんとなり堅まってしまう。この成功に、山猫は一郎を裁判所の名誉判事になることを依頼し、そのたびにお礼をするという。一郎は承諾するがお礼はいらないと述べる。これに対し山猫は自分の人格にかかわるからお礼はとるように一郎にたのむ。山猫にとって人格は、個人としての主体性や人間性ではなく、世間に対する体面、世間体であった。

山猫は以後の葉書の書式について、宛先を「かねた一郎どの」とし、差出人を「裁判所」とする提案をする。それに対して一郎は承諾をする。なぜ山猫はこの提案をしたのか。なぜ一郎はそれを承諾したのか。宛先の「かねた一郎さま」が「かねた一郎どの」に変わっても、差出人が「山ねこ拝」から「裁判所」に変わっても、一郎は頓着しなかった。

一方、山猫が、この提案をした理由は、自分を「山猫」と自称したくなかったからではないのか。馬車別当は山猫のことを、葉書には「山ねこ　拝」と書き、一郎には「山ねこさま」と答えているが、山猫は一郎に自分のことを「山猫」ともそれに替わる自称も名乗っていない。それが里の人間による命名なら、彼には彼による自称があってよいが、彼はそれを明かさない。その替わりに差出人を場所名の「裁判所」とした。それに合わせて宛先を

「かねた一郎どの」にした。

山猫の権威主義の言葉と態度とは、天真爛漫で相手の気持ちを思いやることのできる一郎のもう一つの側面である合理的な大人を引き出してしまったようである。山猫はしばらく逡巡してから葉書の文句について、これからは「用事これありに付き、明日出頭すべし」と書くことを提案する。それに対して一郎は、「さあ、なんだか変ですね。そいつだけはやめた方がいいでせう。」と笑って云う。この一郎の態度と言葉には、天真爛漫で相手の気持ちを思いやる一郎の面影はまったく消失している。

一郎に拒絶された山猫は、ぞんざいな態度をますますあらわにする。山猫は残念そうに下を向いていたが、やっとあきらめて、「それでは、文句はいままでのとほりにしませう。」と云い、今日のお礼として、「黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どっちをおすきですか。」と一郎にたずねる。一郎は黄金のドングリを選ぶ。山猫は鮭の頭でなくて、まあよかったというように、馬車別当に、ドングリを早く持って来るように、一升に足りなかったらめっきのドングリもまぜてこいと云う。今日のお礼として、裁判に集まったドングリたちと同族の黄金のドングリ一升と人間の子どもが食べもしない塩鮭のあたまとの二者択一を一郎に迫る山猫も山猫である。黄金のドングリを選択した一郎は、ますます合理的な判断をする大人の特質を持たざるを得なくなる。

12．山猫拝という葉書はなぜもう来なかったのか

山猫拝という葉書が二度と来なかった理由は、ドングリ側から、山猫側から、そして一郎側からの三者の立場から推察することができる。ひとつは、山猫による支離滅裂の申し渡しがドングリたちを堅まらせてしまったように、一切の希望を剝奪されたドングリたちはもう二度と誰が一番えらいかという主張をする力を喪失してしまったという推論である。二つめは、ドングリたちはやがて山猫の支離滅裂の申し渡しによるショック状態を脱して再度誰が一番えらいかの判事を山猫に求めたが、山猫は支離滅裂の申し渡しの効果を再利用してドングリたちを再度黙らせることができたという推察である。三つめは、一郎が推理するように山猫が提案した「出頭すべし」という葉書の文句を一郎が拒絶したことにある。「やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言へばよかつたと、一郎はときどき思ふのです。」の言葉で「どんぐりと山猫」は終わる。この言葉は、天真爛漫で相手の気持ちを思いやることのできる子どもの一郎と合理的な判断をする大人の一郎との二つの特質のせめぎあいを意味している。賢治は読者に一郎の立場にたって葉書がもう来なかった理由を一郎といっしょに考えることを促している。

13．face-to-face の可能性

「どんぐりと山猫」は、山猫のように権威主義的で自らの威光、優越性を前提に人間関係を取り仕切ろうとする意地悪な主体に対して、どのようにface-to-face の人間的な触合いの関係に入ることができるかを読者に問いかけている。賢治は一郎のように天真爛漫で相手の気持ちを思いやれる子どもの特質を持つだけでは不十分であることをほのめかしているように思われる。一郎の内面において子どもの特質が退行してしまい、目につく相手の欠点に基づいて合理的な判断をする大人の特質が喚起されてしまったことは、相手と同類の意地悪な主体に同化しまう人間関係におけるあやうさを示唆しているように思われる。

賢治は童話集「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」の刊行に際しての広告チラシにおいて、「心象スケッチ」は、「たしかにこの通りその時心象の中に現はれたもの」であり、「どんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通」であり、「卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈」と述べている。「卑怯な成人」は、権威主義的で自らの威光、優越性を前提に人間関係を取り仕切ろうとする意地悪な山猫と重なる。一郎は、「心象」の主体である子どもの特質とともに「卑怯な成人」としての特質を備えた二重的存在、両生類的な存在である。これは子どもであるが大人になるための教育を受けている学童の二面性である。そうすると一郎の氏名「かねた一郎」は、黄金の稲穂の稔る田の男子としての「金田一郎」という解釈の他、子どもと大人の両特質を兼ね備えた男子としての「兼ねた一郎」とも解釈できる。

「どんぐりと山猫」は、子どもと大人の二面性を兼ね備えた学童がどのように「卑怯な成人」と

face-to-face の人間的な触合いの関係に入ることができるかを読者に問いかけている。「卑怯な成人」を前にしていかに「心象」の主体であり続けることができるかを賢治は読者に問いかけている。

名前は「卑怯な成人」だけでなく「心象」の主体の呼称でもある。そうすると「山猫」はどうだろう。「山猫」はその「心象」の主体の呼称であろうか、それとも「卑怯な成人」の呼称であろうか。元々、その霊威に身も心もすくむような畏怖の気持ちを里の人々に抱かせた山の存在は、とくに文明開化の明治以降は軽蔑すべき存在へと落ちぶれてきた。「山猫」が里の人間による命名なら、時代とともにそれは軽蔑的な意味合いのこもった里の言葉になり、それを山猫が不愉快に思っていたとしても不思議ではない。実際、山猫は一郎との出会いにおいて自分が「山猫」であるとは一切名乗らなかった。そこには里の言葉である軽蔑的な意味合いのこもった「山猫」を自称としたくない気持ちがあったと思われる。山猫は、畏怖の気持ちを抱かせた山の存在者としての名前を喪失したことに深く心を悼めていたのではないのか。彼が権威主義で意地悪になった本当の原因は、それではなかったのか。山猫のポーカーフェースの下には、彼の本当の心、深く傷ついた心があったのではないのか。

山猫の本当の心すなわち彼の「心象」の主体に接し得ることが face-to-face の人間的な触れ合いで起きることである。face-to-face になってはじめて、山猫のようないやな対象者に反面教師ではなくて、積極的な「私の先生」になり得る特質を見いだすことができるようになる。一郎は、お説教の言葉を覚えていたが、その本当の意味が分かるまでには成熟していなかった。それゆえに山猫への畏怖の気持ちよりも事物の欠点が気になって仕方がない「小人(しょうにん)」[10] の特性があらわれた小学生であった。一郎は、山猫の中に潜在する「私の先生」となる特質を見つけることができなかった。「やっぱり山猫の耳は、立つて尖ってゐるな」と、想像してきた外見のイメージからしか山猫をとらえることができなかった。山猫との face-to-face の遭遇はうまれなかった。山猫の「心象」の主体に出会うことができなかった。相手に潜在する「私の先生」になる特質を見つけるには、相手の欠点にとらわれないことである。それは「小人(しょうにん)」を脱すること、私意を離れること、利己的視点を脱することである。

14．おわりに

明治の文明開化は、近代国家社会の発展のために合理的な良識ある主体による近代啓蒙主義的思想を輸入した。近代啓蒙主義的思想の教育により良識ある主体の育成が促進されるにつれて、多くが自然への畏怖の気持ちを喪失してしまった「卑怯な成人」に堕落するという現実に賢治は心をいためていたと想像される。賢治は、良識ある主体ではなく、自らの心象の主体、自然への畏怖の気持ちをもつ主体による心象スケッチを公表することで、読者の心象の主体との face-to-face の人間的な触合いを意図し、その心象スケッチを「どんぐりと山猫」をはじめとする 9 篇の童話を含む童話集「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」として刊行した。「注文の多い」とは、良識のある主体同士では face-to-face の人間的な触合いができないこと、そのためには良識の主体からもう一度自らの心象の主体、自然への畏怖の気持ちをもつ主体へと回帰することを意味するように思われる。それを「あなたのすきとほつたほんたうのたべものになること」と賢治は表現したのであろう。

15．要約

本研究は、童話形式の心象スケッチである童話集「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」の冒頭を飾る童話「どんぐりと山猫」において、この童話集の序で賢治が読者に願った「あなたのすきとほつたほんたうのたべものになること」が何かを読み解くことであった。

賢治の云う心象が、人やものに向き合う正直で無垢な賢治の心に「他者」が自らを啓示したことであり、彼の心象スケッチが心象のその通りの言語的表出であるとすると、その心象スケッチは人やものについての共有された概念に応じた描写ではなく、「他者」についてのスケッチとなる。このように心象スケッチの読者には、描写された人やものについての「他者」のスケッチがもたらす意味と人やものについての共有された意味という二重の意味が生じることになる。

「どんぐりと山猫」では、この二重の意味は、近代世界への開国すなわち明治維新以来の近代的な

意味と西洋化以前の伝統的社会における意味に対応している。山の中の山猫を求めての一郎の旅立は、通りをねり歩いて花巻の古い鳥谷ヶ崎神社に還御する神輿の軌跡を追うことによる神を求めての旅立と心理学的に等価である。おかしな葉書に予告されためんどうな裁判は、近代的な裁判ではなく、ボスの山猫による部下のドングリたちへの古風な捌きであった。個々の黄金いろのどんぐりの自分が「一番えらい」という主張は、近代的な言葉の「偉い」をそれと同様の意味をもつ古語であり自然の霊威に対する畏怖の気持ちを原義とする「かしこし」に置き換えるならば、全く異なった意味をもつようになる。

山猫の意地悪で権威主義的で利己的な態度と言葉は、一郎から合理的な大人の特質を引き出してしまい、正直で無垢で思いやりのある学童の特質を消してしまったために、両者の face-to-face の遭遇は起こらなかった。賢治は、正直で無垢で思いやりのある学童の特質をもつ読者に対して、意地悪で権威主義的で利己的な成人との face-to-face の遭遇に自らを置いて、正直、無垢、思いやりを保ち続けて、相手に反面教師ではなく潜在する「私の先生」となる特質を見いだす勇気を持つことを求めているように思われる。

引用・参考文献

1）Hiroaki Sato. Introduction. In: Miyazawa Kenji: selections. University of California Press; Berkeley and Los Angels: 2007, pp.2-3.

2）宮澤清六，他編．新校本宮澤賢治全集．第 15 巻 書簡　本文篇．筑摩書房；東京：1995，pp.222-223．

3）宮澤清六，他編．新校本宮澤賢治全集．第 12 巻 童話［V］・劇・その他　異稿篇．筑摩書房；東京：1995．

4）宮本三郎，他校注者．校本　芭蕉全集．第 7 巻 俳論篇　三冊子．富士見書房；東京：1989，p. 175．

5）C, W. Hufeland. Enchiridion Medicum, Or, the Practice of Medine, The Result of Fifty Years' Experience. William Radde, NY. 1855. p.6.

6）宮澤清六，他編．新校本宮澤賢治全集．第 16 巻（下）補遺・資料　年譜篇．筑摩書房；東京：2001．

7）關登久也．宮澤賢治素描．協栄出版社；東京：1943．p.151．

8）藤井義博．新渡戸稲造が模索した日本人の生き方 ── 栄養療法の知的枠組についての研究 9 ──．藤女子大学紀要（第 II 部）2012；49：57-70．

9）藤井義博．良寛禅師の戒語の普遍性．藤女子大学紀要 QOL 研究所紀要．2008；3：11-24．

10）藤井義博．道元禅師の学道の構造 ── A. H.マズローの成長的視点による正法眼蔵隋随聞記の分析の試み ──．藤女子大学紀要 QOL 研究所紀要．2007；2：15-25．